ペニー・レイン

タン タン ピタン
タン ピタン タン
…この季節はいつもこうでさあ
お陽さまはささねえ うっとうしい雲に霧 おまけに今夜はこの雨…!
……ちっせえだんなあ ニューボンからきなすったってえ?
パチャ パチャ パチャ
だんなあ
そうだよ
う〜〜ふ
ブル
ほ〜んとにこの雨ん中いまから街道こえてウイッシュまでいきなさるんでえ?
そうだ
雨がふってんのに…?
小雨だ

雨なのに
馬がいかれちまう
うふ〜く
酒場へでもいって
酒でも飲んでいい子だきてえ
山賊でも出そうであっしゃ
うぐ
!!
おお
つめてえ雨だったしっけいぼっちゃん

カネ出しな
オレたちは盗賊さまさ
この街道に根をはってる
へへえ…運がわるかったなぼっちゃん……
いい子だ
あんた一人か？
…らしいな
こいつはなんだい
ドン
カタン
よっ
バタン

どうだってえ
だ〜めだよ
とっつあん
馬車が一台だ
雨でえものが
めっきりへった
ぎょ者は
ぶっ殺した
客は
つれてきた

客?女客か
カネを持った
ガキだ
いい子だよ

ふーん

なるほどね…
そっちの
でけえ
箱は?

ホトケさん…
なに？
おい あけて みろ
カタン
こりゃ…子どもの遺体じゃないか
なんのまねだ
知るもんですかい いったでしょ ホトケさん
こいつは身内か？おい…！
……！

つれてって
とじこめとけ
ギー
そのガキは
カネづるだ
へい
よ
これは
…？
ホトケさん
じゃしょうが
ねえ　雨が
やんだら
どっかへ
うめてやれ
きな
なんかへんな
ふてぶてしい
ガキじゃねえか
泣きも
わめきも
せん
おとなしく
してりゃ
いじめや
せんよ
これでも
オレたちゃ
気は
いいんだ
へへ
家庭的な
盗賊なんだ
とっさんを
頭に兄弟
十三人

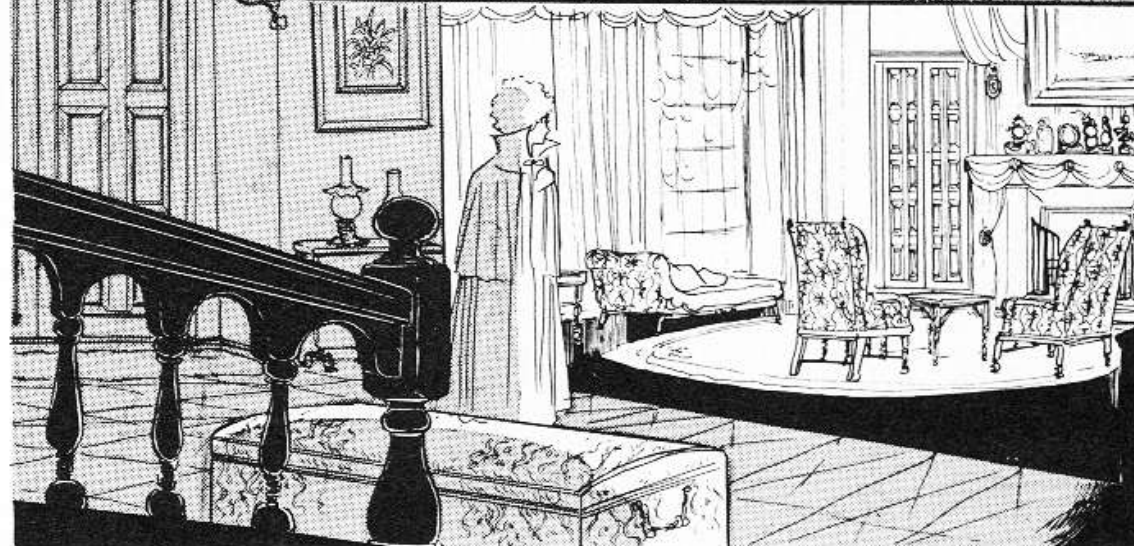
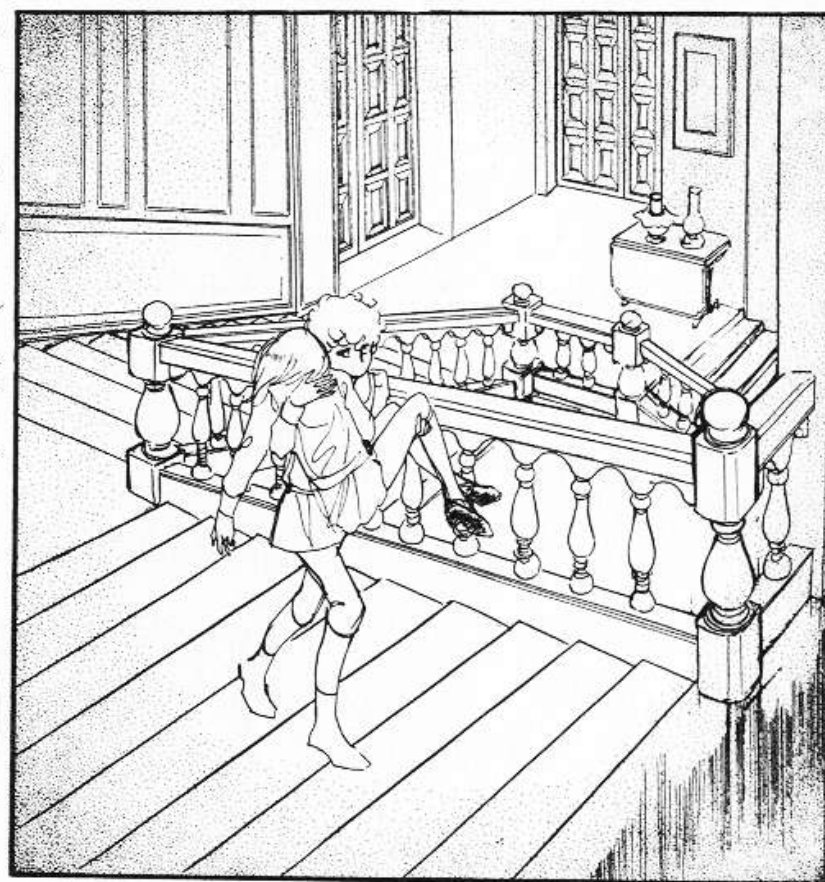
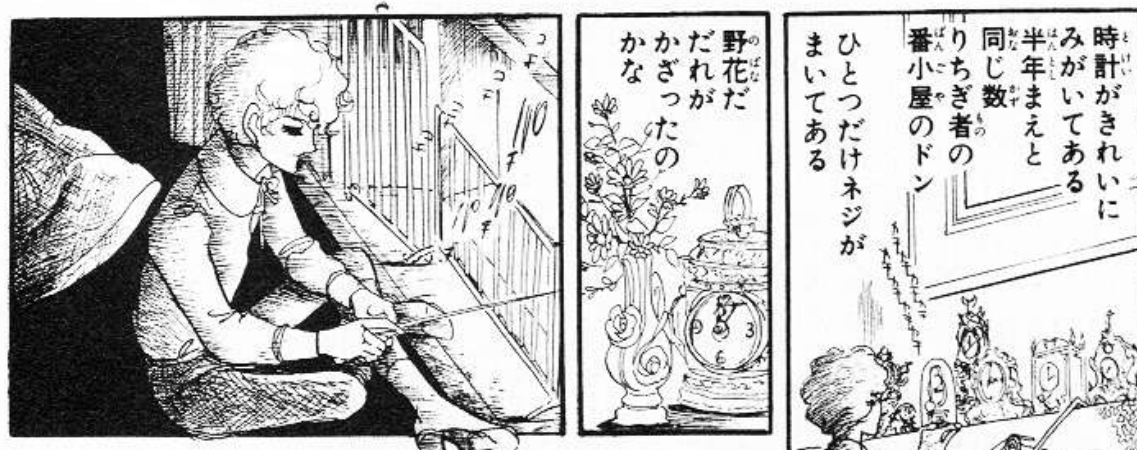
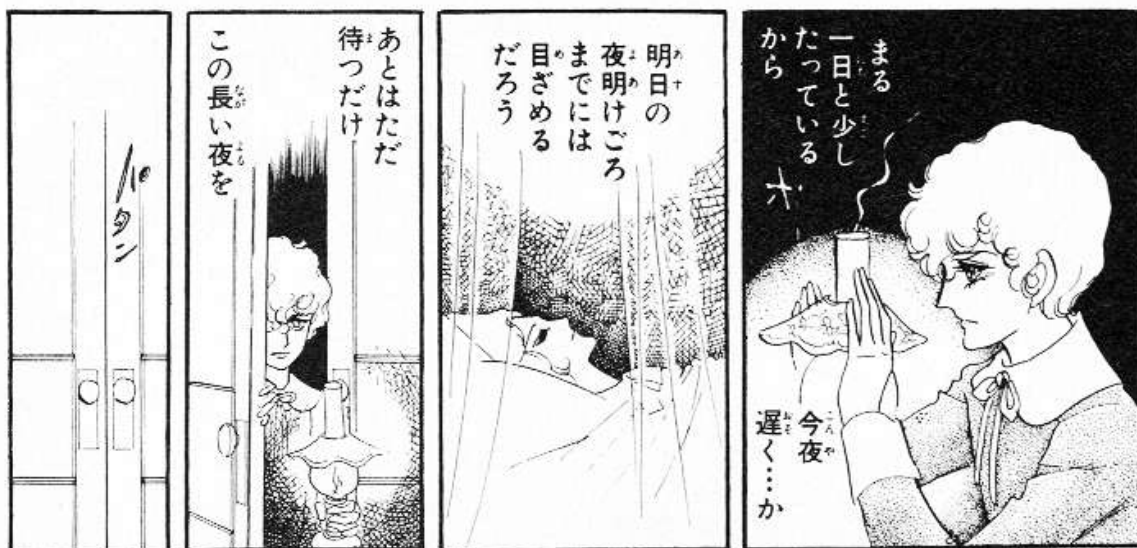
なんだ?
なんの音だ?
ギー…?
…おい
いってえ…!
なんだ!
おまえは
なんだ!?
なにを
いったい

サクサク
サクサク
サワサワ
ガタ
ゴト!
パシッ
いそげ

早くウィッシュの小さな館へ—
いそげ
いそげ
アランの目がさめる
ポーツネル男爵さまの若さま…!
あっしをお忘れですかいドンですよ!
半年ほどまえここを通っていかれた男爵さまたちの馬車のおせわをいたしましたよ!
ああ…
館へいくんだ
お館へ?

へえほんとーにいらっしゃるころだとは思ってました
六 七か月後にまたよると男爵さまから聞いとりましたから
お館はきれいにしてございますよ
まあ でもこの時期じゃ
殺風景でなにもありゃしません…なんでまた
お一人で？…男爵さまやメリーベルお嬢さまは？
ああどうもかってにしゃべっちまって…

この荷物はここでようございますかい
かるうございますね
ああもういいよ
まきや食料の場所はごぞんじですね
もし不自由があれば娘でも手伝いに
この館には
近づかないでくれ
貴族さまの考えなさるこた平民にゃ解せん
あんなお館にお一人でつきあいのわるい
でも用がありゃよびなさんだろし
きっと男爵さまたちゃあとからきなさるんだろう
まえもひっそりと立ちよんなさったし

まる
一日と少し
たっている
から
今夜
遅く…か
明日の
夜明けごろ
までには
目ざめる
だろう
あとはただ
待つだけ
この長い夜を
パタン
時計がきれいに
みがいてある
半年まえと
同じ数
りちぎ者の
番小屋のドン
ひとつだけネジが
まいてある
野花だ
だれが
かざったの
かな
雨の音
風の音
夜の音
火の音
目をおさまし
目をおさまし
アラン

目ざめよ神話
ぼくたちは時の夢
昔がたりと
未知への畏怖が
ぼくらの苗床
ぼくらの歌

さようなら
さようならを
いっておしまい
アラン
人間界の
すべてのものに

わかっているね
ぼくたちが
なに者かこれから
どこへゆくのか

早く
目をおさまし
早く

永遠を駆ける
馬車が出る

おまえ
おまえ
ぼくの
小鳥
ぼくの
愛
銀の髪
おまえ
おまえ
エドガー
エドガー
エドガー!!
エドガー!!

メリーベル
メリーベル
メリーベル
ぼくと
くるね
おいでよ
おいでよ
おいで
おいで
一人(ひとり)では
さびし
すぎる

カタン
朝？
いまの
音は？
ビク
だれっ
あ…あ
あたし…
野菜を少し
…父さんが
若さまの
じゃまをしちゃ
いけないって…
だから…そっと
……
野菜？
いらない
…でも
父さんが
持ってけって

時計のネジを
ひとつだけ
まいといたのは
きみ？
と
父さんが
そうしとけって
あの花も？
父さんが
かざっとけ
って？
番小屋の
ドンの娘
か
朝といっても
この
暗さ
アランは
—？
—
それにしても
この雨

まだ目ざめはこない
まだ変化しきっていない
パチ
パチ
パチ
パチ
キイ
バタン
どうしたんだ……
まさか!?

まさか
…
そんなこと
…そんな
ことには
ぜったい
させない！

パチパチ

そうだ
ぼくだって
変化に
三日も
かかったと
シーラは
いってた

それでいったら
まだ
二日めだし
きっと変化が
ゆっくりと
進んでるのだ
アランは

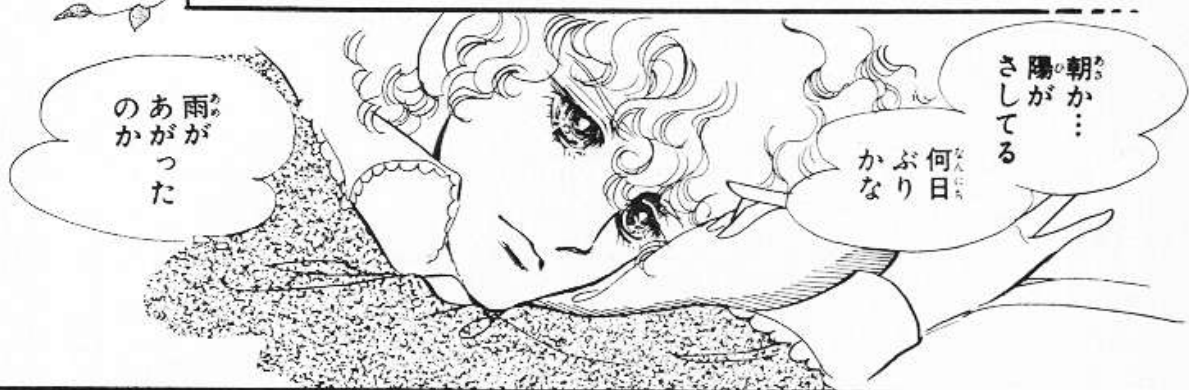
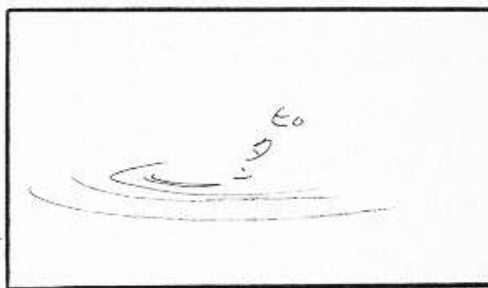
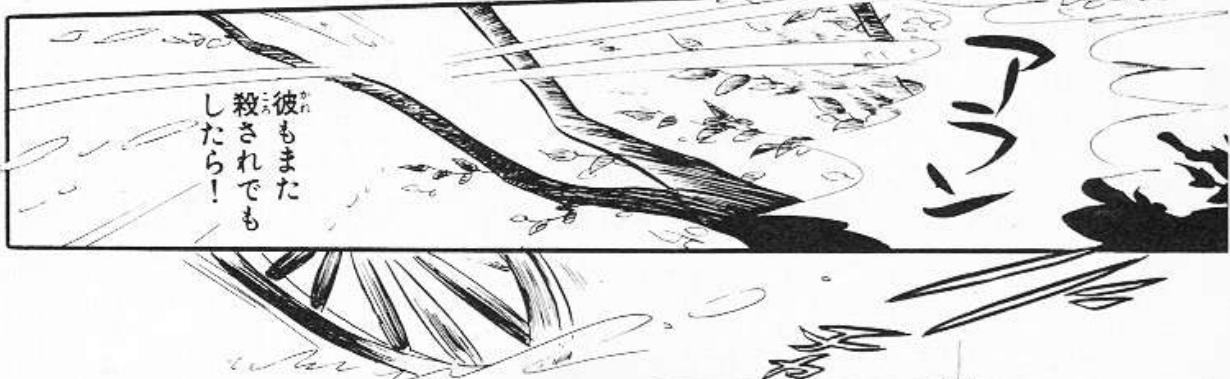
きっと
じき
目をさます

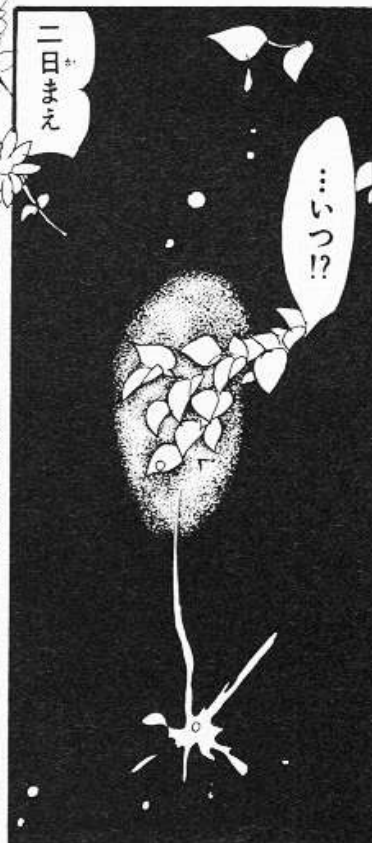
メリーベル
だって

メリーベルだって…
メリーベルは
あの子は
ぼくが
仲間に
くわえた
ちゃんと
一日で
目ざめたのだ
…
花の中
花の中
ぼくはどれほど
あの子を
愛したろう
だが
しけった空気や
つめたい夜風
ま昼の陽が
いつも
あの子を
弱くした
ぼくたちは
よく交流を
おこなった
指先から
流れる
あつい血を
ゆっくりと
お互いの中に
流しこむ
古い血は
消化され
より新しくなる
メリーベルと
ぼくは
よりそって
ときには
半月も
静かに
ねむりこんで
いた
メリーベルの
弱さは
あなたのせいよ
エドガー

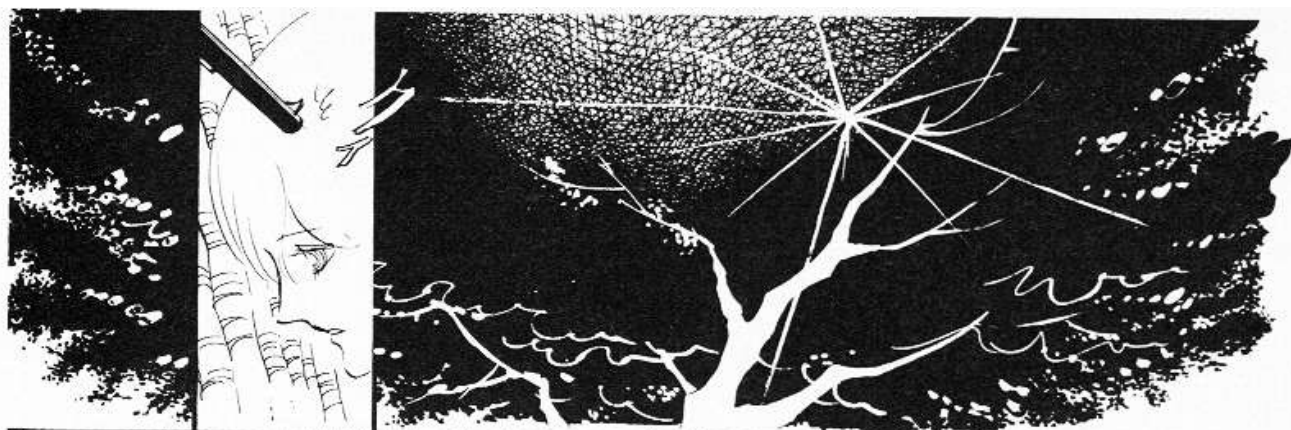
あなたの血はメリーベルにあわなかったのだわ
あれだけの濃さをもちながら
おかしなことだが
まあおまえは一族のうちでもいろいろと特異だからへんだからしようがないおまえは異常だからかわりものだからおまえは
まだときどきは人間にもどりたがってる
バラを散らすその手を持って――!
ときどきじゃない
いつだってもどりたかった
なのにメリーベルの手をとって
エドガー!エドガー
殺してしまった!――殺してしまった
ぼくが仲間にくわえて

エドガー！
エドガー！
アラン！
目を！
ぼくは一人で
思い出ばかりを
追いすぎる
――なぜ目を
さまさない
きみを
つれてきたのが
まちがい
だったと
しても
ぼくが
生きては
いけないもの
なのだと
しても
たのむから
目を
さまして――
アラン
雨
―雨
なんて暗い――
……雨の
せい……？

湿気だろうか?
この重い――
なまぐさい――
これがアランを
目ざめさせない
メリーベルも
水にはたいそう
弱かった
雨がやめば
やみさえ
すれば
……
パ
パ
パ
パ
パ
パ
おいでよ
おいで
おいで
一人では
さびし
すぎる
さびしすぎる――

ピ。ウン
朝か…陽がさしてる
何日ぶりかな
雨があがったのか
雨が…
アラン! 雨があがった
アラン!
アラン……

アラン…
アラン!?

出てった？バカな！
目ざめたままで
かわいたくちびるのままで
いったいどこにどこにどこに
へたに人間をおそったりしたら
彼もまた殺されでもしたら！
アーン
お館の若さま！
いま 知らせにいくとこでした！外に出ないほうがええ うちの娘…山賊にやられた
……ドン！

どこだアラン

どこをさまよっている?

戦ったのは
一角獣とライオン
母さんとマーゴット
おじさんとおばさん
ここはどこ
まぶしいな
眠い
光にとつぜん夢をけられて
手足がもげそう
これも夢かな
真昼の夢かな
ひどく怠惰
ひどく　おっくう…
なにか　ほしい
なにか　おくれ
だれか　そこに
そこに　だれか
いる　はず
なにか　おくれ

たて…
たてって
いってるんだ
どうした
こいつ
クツも
はいて
ねえぜ
だが
丘の中腹の村のやつらは
館の
ガキ
だろう
え？
西っがわの
森を
さがしてる
歩け！
さあ！
夜まで
館に
かくれ
てて
どうした
こいつ
病気じゃ
ねえか
闇にまぎれて
逃げてやる
おっかねえ
百姓どもめ
また
ふってきた
あにい
キズ
いたま
ねえかい
ああ
それより
用心しろ…
ちっくしょう
百姓どもめ
いつか
みな殺しに
してやる

ドッ
ドドッ
イザック……!!
なんてガキだ
会えてうれしいぜ…
カチャ
二連発じゃもうカラだ
おあいにくだな
いいか
悪魔のガキめ

……あとで
おまえをぶち殺して
やるぜ
仲間の分
ぜんぶな
街道で見つけた時
…殺ってりゃ
よかったんだ!
…さあ…
こっちへ
きな…
手をあげてな
うたれたく
なけりゃな
こいつと
…あんたが
つかまえてる子
あのとき箱に
はいってた
ホトケさんだよ
手を
あげろっ
てんだ!
手を…
わ…!!

アランの
最初の
えじき……！
かわいそうに
この男
自分がなに者を
相手にしたのかも
気づかぬうちに
死んでしまって……！
おい
ここだ
一人…
二人
死んでる！
これで
ぜんぶか？
盗っ人は
仲間われでも
したのか？
アラン

急激な変化と
急激な目ざめ
―アランは夢うつつ
おまけにこのキズ―
この雨がやめば
キズ口はすぐにでも
いえるのに…
いまいましい
湿気…！
血はあふれて
流れてる
ばかりだ
このままでは
村は
さけよう
ウィッシュ村は
一致団結が
強固

ハッ
なんだ？
きみは……！
…おお
くすん
お人形みたいな
子だ
ヒックシャくっ
たいした血の量じゃ
ないな　だが
ほうっておいても
餓死か凍死だ

運よく
だれかに
拾われたと
しても

両親の
いない
貴族の娘じゃ
ゆく末は
知れてる

…名まえ
は？
…リデル

パチパチ
パチ
パチパチ

火だね
かわいた
空気を
つくるよ
どう気分

わかんない…
なんだか
ぼうっとして
どこまでが
夢なのか…
いつ目が
さめたのか…
わからない
覚えてない…

でも
ぼくが
わかるね
うん

「ペニー・レイン」1975年３月